

3

[報告 | report]

文書調査40年

山梨県大月市星野家文書調査について

40 Years of Archival Volunteer Activity:

About the Arrangement of Hoshino Family Archives in Otsuki City, Yamanashi Prefecture

久保田明子 | Akiko Kubota

はじめに

1973年に開始した山梨県大月市星野家文書調査は40年近い歴史を持ち、現在も「星野家文書調査会」によって年に2回、春と秋の調査を実施している。本稿では、調査対象である星野家、星野家文書の概要と調査について報告する。

1 —— 山梨県大月市星野家と星野家文書^[1]

1-1: 山梨県大月市星野家

山梨県大月市星野家(以下、星野家)は、近世期に代々甲州道中下花咲本陣・問屋、下花咲村名主をつとめていた旧家であり、建築物、古文書など多くの貴重な文化財を今に伝え

ている。またその住宅家屋の一部は江戸時代の本陣建築を現在に伝える貴重な文化遺産として1976年5月20日に国の重要文化財に指定された(指定番号01995)。文化庁のwebページ内にある「国指定文化財等データベース」によれば^[2]、「星野家住宅(山梨県大月市大月町)」として、「主屋」、「靱蔵および味噌蔵」、「文庫蔵」が重要文化財(建造物)、附(つかけり)として「家相図一枚」が重要文化財に指定されている。「主屋」と「文庫蔵」は嘉永年間、「靱蔵及び味噌蔵」は天保6年以前の年代の建造物とされており、解説文には、当文化財は「大規模で良質、細部までよく残る。」と記されている。「星野家住宅」^[3]は現在も甲州街道沿いにその姿を置き、その一部は日常的にも使用され、調査対象となる文書群もこの中で現在も保管されている。

星野家は1880(明治13)年6月より始まった明治天皇の山梨・三重・京都方面への巡幸の際、「御小休所(おこやすみどころ)」となった歴史を持つ^[4]。そのため1919(大正8)年に制定された「史蹟名勝天然紀念物保存法(大正8年法律第44号)」^[5]によって、1935(昭和10)年11月2日に星野家は「明治天皇聖蹟」の指定を受けた^[6]。

「史蹟名勝天然紀念物保存法」は、歴史学者の黒板勝美、植物学者の三好学らの尽力により成立した、近代日本に





おける最初の文化財保護に関する法令である。なお、同法律の対象のなかに文書・記録は含まれていないが、同法律制定の前年、1918(大正7)年10月に東京府より出された「史的記念物天然記念物勝地保存心得」(府告示第339号)では、「史蹟」とともに文書・記録などの「史料」も「史的記念物」として認識していた。そのため同法律でもその影響が及ぶとの見通もあったが、“明治天皇の聖蹟”の政治性(政治的意図)の影響を強く受けることにより、そのような「史的記念物」の考え方が困難になっていったという[7]。このことは近代日本におけるアーカイブズ学的問題の1つと考えられる。なお、戦後、日本全国にあった「明治天皇聖蹟」は、GHQの民間情報教育局(CIE)との協議を経て1948(昭和23)年6月29日に全面的に指定解除を受けることとなり、星野家も指定を解除された[8]。

「史蹟名勝天然記念物保存法」に関する問題、また「明治天皇聖蹟」の指定から解除の過程やその後の在り方の問題は、近現代における日本史、特に近代国家のなかでの「明治天皇」の政治性の意味の検討、または、アーカイブズの問題、焦点を絞れば文化財事業、文化財保護の歴史を検討する上で大変重要であるが[9]、今ここでそのことを検討はしない。ただ、近世期からの歴史のなかで「御小休所」となり(1880年)、それによる「明治天皇聖蹟」の指定(1935年)、そしてその解除(1948年)、また住宅家屋の重要文化財指定(1976年)ということを経てきた星野家の歴史は、近世から現代における同家がそういった点も含めて多角的に重要であることを示していると考え。そしてその多くを担保しているのが星野家の歴代の人々と星野家文書であると言える。

1-2: 星野家文書 [10]

星野家が月に至る経緯については史料が残っていないため知ることができないが、近世初期より地域では有力な地位にあったと考えられる。また、星野家では米穀や薬種の販売、絹織物生産などを行っていた時期もあった。そのため星野家文書は、私的な文書だけでなく、本陣・問屋文書、名主文書、地主経営文書など、その来歴によって豊富な種類と内

容、そして量を持つものとなった。また、明治以降のものも、文書以外に新聞や雑誌等の刊行物、印刷物も相当に多く残されている。このように、近世前期(明暦年間)から昭和期に至る、2万点以上の点数を持つ[11]山梨県有数の大文書群である星野家文書は、1969(昭和44)年8月8日付で大月市指定の有形文化財(書跡)となっている[12]。

また、星野家文書が今までどのように保存されてきたか、その保存場所や保存状況などについては、詳細はわかっていない。しかし、長い間日常的に、主屋、文庫蔵、硯蔵・味噌蔵などに分散して収蔵されていたことが保管の状況や調査のなかでわかった[13]。また近年においては、重要文化財であるために行われた数度の星野家住宅の修理工事の実施のなかで文書が整理・移動を余儀なくされることもあった。

なお、星野家文書を単に家に残された財産としてだけでなく、「文化財」として、あるいは「過去の大切な記録」としての意識を持って実際に具体的な整理と保存を行ったのは先々代の星野家のご当主である星野奇(くす)氏が近年では初であったと考える。例えば奇氏は1965(昭和40)年9月に茶箱を改造して鍵付の古文書箱を作成し古文書箱用の棚を制作したことが、現在も残る古文書箱の第一箱の裏蓋に貼られたご本人の記録から知ることができる。そしてこの記録は調査会代表の安藤正人氏によれば「保存状況についての唯一の記録」だと言う[14]。また、現在のご当主である星野喜忠氏は子どものころ祖父である奇氏に、膨大な量の古文書の箱が当時家の出入りに置かれた理由として「万一、火事になったらこの箱を一番先に表に出せるようにしているのだ」と言われた、というエピソードを語っている。[15]同様のことを奇氏は1967(昭和42)年8月26日付で古文書箱と古文書棚の図面に「この箱を一段に8個計16個を入れ渡し上記棚は本家入口の土間向ふ座敷に備えたりこれは火災の際に真先に持出し避難せしめんがためなり、主人奇の誕生日記念に注文す 製作者 奈良三郎 126000円^マ 42.8.26日所先生外古文書分類に來られた時記す」と書き込んでいる[16]。そういった意識の高まりの背景には、1950年代後半より断続的

に行われた星野家の文書調査を受け入れた経験もあったかもしれない。その後、文書が市の有形文化財、建築物が国の重要文化財に指定されるが、そのなかで星野家ではより一層保存や維持の意識を高めたと思像される。竈氏、先代の三郎氏、そして喜忠氏に至る近年の3代のご当主が深い熱意を持ってそのことに尽力されていることは、星野家と星野家文書の現況を見れば自明である。その点ではいわば非常に恵まれた環境で星野家は残り、文書調査が行われ続け、地域の記憶が今に残ったと言えるのではないであろうか。

2 ―― 星野家文書調査

ここでは、表1を参照しながら星野家文書調査のこれまでの

概要を述べていく。
星野家文書の調査としての最初は1950年代後半であった。その後、2012年までを概観すると、その状況から、

- ― (1)1957-1975年:調査第1期
- ― (2)1976-1993年:調査中断期(星野家解体修理工事期)
- ― (3)1994-1996年:調査第2期
- ― (4)1997-2001年:調査再中断期
- ― (5)2002-2012年:調査第3期

に区分できる。
ここでは、上記について1994年以前と1994年以降に分けて述べることとする。

表1 ―― 星野家文書調査(1957年－2012年:概要)

西暦	年号	星野家文書調査	星野家
1957	昭和32	中央大学歴史学会が夏期農村歴史調査として調査	
1958	昭和33	中央大学歴史学会が夏期農村歴史調査として調査	
1959	昭和34	中央大学歴史学会『史料目録第一集―農村歴史調査報告』 「甲斐北都留郡下花咲村一旧家(H家)文書目録」発刊	
1960	昭和35	中央大学歴史学会『史料目録第二集―農村歴史調査報告』、 「甲斐北都留郡下花咲村星野家文書目録」を収録して発表	
1965	昭和40		当時のご当主・竈氏により、古文書箱と専用棚を制作
1967	昭和42	徳川林政史研究所による調査	
1969	昭和44		8月、「星野家文書」が大月市指定の有形文化財に指定
1973	昭和48	10月、大月市史編纂事業の一環として 東京大学大学院山口啓二ゼミが史料整理に参加	
1975	昭和50	大月市史編纂室による史料整理と目録作成作業 5月、大月市史編纂室編「星野家文書目録第一集」がまとまる →この後、調査と整理の作業を一時中断	
1976	昭和51		5月20日、「星野家住宅」が重要文化財に指定
1982	昭和57		10月、『重要文化財星野家住宅文庫蔵保存修理工事報告書』刊行
1985	昭和60		文庫蔵の解体修理工事開始
1987	昭和62		文庫蔵の解体修理工事完工 10月、『重要文化財星野家住宅文庫蔵保存修理工事報告書』
1990	平成2		重要文化財星野家住宅修理委員会が結成され、 主屋の解体修理工事開始
1993	平成5	6月－9月、温湿度計測実施	
1994	平成6	4月、温湿度計測実施(～1995年4月) 9月、星野家文書調査再開[第1回]	3月、主屋の解体修理工事竣工 10月、『重要文化財星野家住宅文庫蔵保存修理工事報告書』
1995	平成7	6月、1995年度第1回調査[第2回] 10月、1995年度第2回調査[第3回]	

2-1：1994年以前の調査

1994年以前には、

- － (1)中央大学歴史学会(1957年、1958年)
- － (2)徳川林政史研究所(1967年)
- － (3)『大月市史』編纂事業(1973年)

の3つの組織・機関によって、断続的に調査が行われている。
以下、それらについて簡単に述べる。

[1]中央大学歴史学会(1957年、1958年)

星野家文書の調査組織の最初として確認されるのは中央大学歴史学会による活動である[17]。同会は1957(昭和32)年と

翌1958(昭和33)年の2回、「夏期農村歴史調査」として星野家文書の調査を実施した。そしてその成果は、1959(昭和34)年に中央大学歴史学会編『史料目録第一集——農村歴史調査報告』に「甲斐北都留郡下花咲村一旧家(H家)文書目録」が、1960(昭和35)年に中央大学歴史学会編『史料目録第二集——農村歴史調査報告』に「甲斐北都留郡下花咲村星野家文書目録」が前年の追加分として収録されて発刊された。安藤正人氏によれば[18]、1冊目の目録では1,661点、2冊目では約500点の文書の情報が収録されており、また2冊とも文書に対する番号は付されていないがほぼ同様の項目によって分類され配列されているようである。ただ、同書には調査時点での保存現状の記録や調査方法・調査日程等についての記録が皆無で、詳細は不明である。

西暦	年号	星野家文書調査	星野家
1996	平成8	5月、1996年度第1回調査[第4回] 10月、1996年度第2回調査[第5回]→一時中断	
2002	平成14	調査再開→10月、2002年度第1回調査[第6回]	
2003	平成15	4月、2003年度第1回調査[第7回] 10月26日、2003年度第2回調査[第8回]	10月25日、「星野家古文書調査三十周年の集い」
2004	平成16	5月、2004年度第1回調査[第9回] 10月、2004年度第2回調査[第10回]	秋、文庫蔵で新しい文書を発見
2005	平成17	5月、2005年度第1回調査[第11回] 10月、2005年度第2回調査[第12回]	
2006	平成18	5月、2006年度第1回調査[第13回] 10月、2006年度第2回調査[第14回]	11月、土間のたたきの修理工事(約1週間)
2007	平成19	4月、2007年度第1回調査[第15回] 10月、2007年度第2回調査[第16回]	
2008	平成20	5月、2008年度第1回調査[第17回] 10月、2008年度第2回調査[第18回]	
2009	平成21	5月、2009年度第1回調査[第19回] 10月、2009年度第2回調査[第20回]	
2010	平成22	5月、2010年度第1回調査[第21回] 10月、2010年度第2回調査[第22回]	
2011	平成23	5月、2011年度第1回調査[第23回] 10月、2011年度第2回調査[第24回]	
2012	平成24	5月、2012年度第1回調査[第25回] 10月、2012年度第2回調査[第26回]	

[出典]

安藤正人編「大月市花咲星野家文書再整理作業 記録ノート No.1(1994.9.23～2005.5)」

安藤正人編「大月市花咲星野家文書再整理作業 記録ノート No.2(2006.5～2012.5)」

星野喜忠・井上豊編『心に舞う』(4)花咲本陣」、日本ステンレス工業株式会社、2007年10月

安藤正人・青木睦「民間所蔵史料の保存・管理に関する研究——山梨県大月市星野家文書を素材にして」、『史料館研究紀要』第27号、1996年3月、186-254頁、等より作成

[2]徳川林政史研究所(1967年)

前章で触れた星野奇氏の図面等への書入れの中に「42.8.26日所先生外古文書分類に来られた時記す」という一文があるが、これは1967(昭和42)年8月に所三男氏らが調査に訪れたことを示していると考えられる。林業・林政史研究の第一人者として名高い所三男氏は1967(昭和42)年には徳川林政史研究所の所長であった。その調査の成果としては、安藤正人氏によれば[19]、同所のゴム印が押されている、『星野家文書目録』という題が入った手書の目録のコピーが星野家に残されているということである。ここには100件余りの冊子文書が通し番号を付されて収録されているようだが、内容は先の中央大学歴史学会の内容と重なる部分が多いようである。また、同書の目録での文書番号と一致するラベルが貼られている史料が星野家文書のなかに見られることから、調査時に一部の文書についてそういった措置をしたことが伺える。しかしやはり、調査の経緯や方法などの詳細はわからない。

[3]『大月市史』編纂事業(1973年)[20]

上記2回に比べて目的がはっきりしているのは、この1973(昭和48)年8月に行われた調査であろう。この調査は『大月市史』編纂事業の一環として、市史の近世期を担当された山口啓二氏の主導でなされた調査である。当時東京大学史料編纂所教授であった山口氏は自身のゼミのメンバーを中心に院生・学生十数名を動員して史料整理を行った。そしてこのとき星野家文書に出会い、文書の整理や調査、そして目録作成の中心となったのが現在星野家文書調査会の代表である安藤正人氏である。そのため、現在の星野家文書調

査会の発端はここに求められる。

安藤氏らは1973(昭和48)年10月より本格的な目録作成に着手し、その後約1年半の間毎週のように大月に通い、約40回の調査を経た1975(昭和50)年5月、大月市史編纂室の名前で『星野家文書目録第一集』をまとめた。同目録には年代順に整理を終えた8,524点について収録されている。また整理の際は、文書を原則1点ずつ大月市史編纂室が作成した文書用の封筒(酸性紙)に入れ替え、文書箱(茶箱)に収納し直したということである。

以上が3つの調査の概要である。このうち(1)中央大学歴史学会と(2)徳川林政史研究所の調査については詳細がわからないので多くのことは述べられないが、ただ(3)『大月市史』編纂事業も含めて、この時期の星野家文書の調査を行う重要な動機としては、当時の歴史学研究の動向の影響があったと考える。これら3回は1950年代、1960年代、1970年代での調査であり、それぞれ調査の意図・意識や調査方法に差異はあったであろうが、「史料保存(地方における近世期の庶民史料の保存)」の意識の高さはこの30年間の調査に通底していると考えられる[21]。戦後日本の歴史学研究の現場では、例えば急激に処分・廃棄されていく文書記録類への危機感の高まりや、歴史研究の多様化(「地方史」、「社会史」、「数量的研究」等研究の多様化;また「市史編纂事業」もその一つの流れであろうか)、あるいは歴史学そのものの模索などが大きなトピックとしてあるが、それらとこの「史料保存」の意識の高まりは深く関係している。そして、星野家文書の調査の開始もまたその流れのなかにあったと考える。

しかし、そういった史料保存(文書調査)の重要性の主張は

表2—— 星野家文書調査(1994年-1996年)

回数	期間	人数	作業
1	1994年9月23日(金)–9月25日(日)	7	茶箱(No.1-7)に関する資料の封筒入替および目録点検、一部の資料の写真撮影
2	[1995年度 第1回]1995年6月9日(金)–6月11日(日)	22	箱No.2-14資料について (1)原文書を読みながら「星野家文書目録」の近世部分についての加筆訂正作業 (2)文書の保存手当て、2グループに分かれて作業
3	[1995年度 第2回]1995年10月13日(金)–10月15日(日)	11	箱No.4、5、13、14、15資料について、目録訂正、封筒ナンバー書きなどの作業
4	[1996年度 第1回]1996年5月25日(土)–5月26日(日)	7	箱No.9-12資料について、目録訂正、封筒ナンバー書きなどの作業
5	[1996年度 第2回]1996年10月10日(木)–10月13日(日)	20	箱No.9-18資料について (1)目録訂正、データ入力、封筒ナンバー書きなどの作業 (2)文書の保存手当ての2グループに分かれて作業 ●10月12日(土):星野家墓所調査

[出典]安藤正人編「大月市花咲星野家文書再整理作業 記録ノート No.1(1994.9.23–2005.5)」より作成

されたが、一方で標準的な史料の調査方法(文書の整理や保存の方法)が確立された訳ではなく、またこの問題は簡単に解決するものでもなかった。ゆえにこの時期の多くの調査は試行や議論を同時にしながら実施をしていた向きがあったのではないだろうか。そしてそれは星野家文書の3つの調査も例外ではなかったと考える。

なお、表1にあるように、1976(昭和51)年、前述したとおり星野家住宅が重要文化財に指定され、その後、建造物の解体修理工事が数年にわたり行われた。その間、調査は実施されず、1994年の再開を待つこととなる。ただし、解体修理工事後、文書が保管されている家屋(主屋2階)の内部の温湿度が高く文書の保存に適しない恐れがあったため、1993(平成5)年6-9月には温湿度計測を実施した[22]。

2-2:1994年以降の調査

1994年以降の調査では、1997-2001年の中断をはさんで2期に区分される。ここでは、それぞれについて順に述べる。

[1]1994-1996年:調査第2期(第1回-第5回)(表2参照)

調査の再開は1993(平成5)年の温湿度計測の結果に促されたようである[23]。この結果により、文書を入れた封筒を酸性紙のものから中性紙のものに入れ替え、また収納している文書箱も一部桐箱に保存しなおす必要がでてきた。また、合わせて1970年代に作成した目録の加筆訂正を行うこととなり、こうして1994年9月、2泊3日の日程で第1回と銘打った調査が実施された。

この第1回の調査の参加者は、安藤正人氏、大学院生2名、学振研究員1名を含む7名で、封筒の入れ替え、目録点検、写真撮影を行っている。また、この調査から安藤氏によって調査記録『大月市花咲星野家文書再整理作業記録ノート』が作られるようになった。以下の記述のほとんどはこのノートによるものである。

以降、表2にあるように、1996(平成8)年までの間に計5回、調査を行っている。作業は(1)目録班と(2)保存班の2班に分かれて行っていることが多いが、これは現在でも変わらないやり方である。

第2回と第5回の参加人数はいずれも20名以上の大所帯であるが、第2回では大学院生7名、学部生6名と、学生の参加が多く、第5回目は大学院生2名、学部生5名とともに6名の品川古文書研究会(品川区で活動していた有志の研究会)の方が参加されている。

こうして行われた5回の調査では、文書約5000点の作業が終了することとなった。

[2]2002-2012年:調査第3期(第6回-第24回:現在)(表3参照)
6年の中断ののち、2002(平成14)年10月に第6回の調査が実施された。作業の内容は前回からの継続である。なお、このときの参加者は13名であるが、そのうち9名が品川古文書研究会の方々であった。

また、2003(平成15)年10月25日には「星野家古文書調査三十周年の集い」が大月市総合福祉会館会議室にて開催された。これは星野喜忠氏の発案によるもので、山口啓二氏、大月市長をはじめ、大月市教育委員会関係者、大月市の郷土史研究家、今まで調査に関った方々など約80名が参加した。そして、ここで安藤正人氏は「重要文化財星野家住宅古文書調査三十年の歩みと今後の課題」と題した講演を行った[24]。

電子データに関しては、2002(平成14)-2003(平成15)年の間に、転換を行ったようである。それまでのデータはデータベースソフトの「桐」を利用して作成されていたが、このタイミングで表計算ソフト「Excel」に変更をした模様である。そして、以後、電子データを入力する際は「Excel」を利用するようになり、それは現在も続いている。

旧来の目録の基本的な点検、加筆・訂正作業は2004年の春、第9回の調査で完了した。しかし、この年の秋に行われた第10回の調査では文庫蔵から新たに文書が発見され、作業が追加されることとなった(この新出分に関する調査は現在も継続中である)。また、第9回からは近代以降の新聞資料の整理が、2006年5月の第13回からは初蔵の文書の調査が開始された(新聞資料については第13回で作業が完了、初蔵については2010年10月の第22回で概要調査までが終了している)。

調査には、毎回安藤正人氏をはじめとする研究者が常に一人以上は参加をしているが、そのほか、様々な大学の大学院生・学生、または企業や国立、公立の文書館に勤務されている方、民間の企業に勤務されている方、大学や研究機関に勤務されている方など、その時々により多様である(但し、例えば当初学生だった人がその後就職しても続けて参加している、と言うような、人は変わっておらず立場だけ変化している、といった方が少なからずいらっしゃるので単純に「多様」である訳ではない)。また、2004年春の第9回から2007年の第15回にかけては地元・大月の方々(大月市教育委員会、大月市郷土資料館、古文書研究会)の参加も見られた。

表3 ―― 星野家文書調査(2002年－2012年)

回数	期間	人数	作業
6	[2002年度 第1回]2002年10月12日(土)－10月14日(月)	13	箱No.16-22資料について、目録訂正作業、封筒入替、封筒ナンバー書きなど
7	[2003年度 第1回]2003年4月26日(土)－4月27日(日)	17	箱No.22-33資料について、目録訂正作業、封筒入替、封筒ナンバー書きなど
8	[2003年度 第2回]2003年10月26日(日)1日のみ	19	箱No.33-35資料について、目録訂正作業 ●10月25日…「星野家古文書調査三十周年の集い」
9	[2004年度 第1回]2004年5月8日(土)－5月9日(日)	9	(1)箱No.35の資料について、目録訂正作業 ●文書点検終了 (2)中性紙封筒入替作業 (3)新聞資料整理
10	[2004年度 第2回]2004年10月23日(土)－10月24日(日)	19	(1)新聞整理・目録作成 (2)中性紙封筒入替と保存装備 (3)文庫蔵蔵内調査
11	[2005年度 第1回]2005年5月7日(土)－5月8日(日)	28	(1)新聞目録作成 (2)保存装備・茶箱から桐箱への入替/ 中性紙封筒への入替/文庫蔵環境調査/生物被害観察 (3)桐箱入替作業 (4)文庫蔵新出分現状撮影・概要調査 (5)母屋2階図書書類整理
12	[2005年度 第2回]2005年10月22日(土)－10月23日(日)	15	(1)新聞目録作成 (2)文庫蔵新出分スケッチ概要記録 (3)文庫蔵IF奥引き戸内書類搬出
13	[2006年度 第1回]2006年5月6日(土)－5月7日(日)	19	(1)新聞目録作成→作業完了 (2)文庫蔵新出分目録記述 (3)(5/6)初蔵調査
14	[2006年 第2回]2006年10月28日(土)－10月29日(日)	21	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)(10/28)初蔵資料蔵出し作業 (3)(10/29)納豆工場史料持ち出し作業 (4)保存装備・文庫蔵1F版本類のクリーニング等
15	[2007年度 第1回]2007年4月28日(土)－4月29日(日)	21	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)文庫蔵写真撮影 (3)初蔵概要調査 (4)保存装備・防虫剤入替/桐箱のフタの取替え/水濡れ対策
16	[2007年度 第2回]2007年10月27日(土)－10月28日(日)	10	文庫蔵新出分内容目録記述
17	[2008年度 第1回]2008年5月11日(日)日帰り	13	初蔵資料の概要調査と仮保存手当て 防虫剤入替
18	[2008年度 第2回]2008年10月12日(日)－10月13日(月)	20	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)初蔵文書概要調査 (3)保存装備
19	[2009年 第1回]2009年5月17日(日)－5月18日(月)	18	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)初蔵文書概要調査 (3)保存装備
20	[2009年 第2回]2009年10月17日(土)－10月18日(月)	13	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)初蔵文書概要調査 (3)保存装備
21	[2010年 第1回]2010年5月15日(土)－5月16日(日)	22	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)初蔵文書概要調査 (3)保存装備
22	[2010年 第2回]2010年10月24日(日)－10月25日(月)	14	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)初蔵文書概要調査 ●初蔵文書概要調査終了 (3)保存装備
23	[2011年 第1回]2011年5月3日(火)－5月4日(水)	17	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)母屋2F文机概要調査 (3)保存装備・防虫剤入替
24	[2011年 第2回]2011年10月9日(土)－10月10日(日)	11	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)保存装備・保存方針の検討/母屋2F配置再検討
25	[2012年 第1回]2012年5月3日(木)－5月4日(金)	19	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)保存装備 (3)追加資料および版本の概要目録作成
26	[2012年 第2回]2012年10月7日(日)－10月8日(月)	13	(1)文庫蔵新出分内容目録記述 (2)保存装備 (3)新規追加資料確認

[出典]
安藤正人編「大口市花咲星野家文書再整理作業 記録ノート No.1(1994.9.23-2005.5)」
安藤正人編「大口市花咲星野家文書再整理作業 記録ノート No.2(2006.5-2012.5)」等より作成

以上が1994年以降の調査の概要である。この期では、6年の中断はあるものの2012年現在まで系統だって作業をしていることが特徴的である。また、毎回の調査の作業記録をとり、「春と秋の年に2回、1泊2日の日程で行う」といった調査の定期化がなされたが、これは調査の順調な継続を促す要因となっていると考える。調査は基本、「文書の全体の確認」→「状態の写真撮影」→「概要調査」→「内容調査」といった伝統的でスタンダードな方法でなされているが、長い時間の経過のなかで、例えば内容調査の際にはパソコンを利用し、直接エクセル形式でデータを入力する方法も採用するなどの変更は加えられている。

また、保存に関する作業にも大きく留意しているのは本調査の特徴であると言える。それは、今期の調査開始のきっかけが温湿度の計測結果であったことも背景にあるのだが、それ以上に、青木睦氏(国文学研究資料館)を中心に、文書の保存に関する研究や実践に関わる方々がこの調査に多く参加している幸運もある。

おわりに

以上に述べてきたように、星野家文書の調査は1957年の最初の調査から数えると60年近く、また継続的な調査を開始した現在の調査会の活動からすると40年と、非常に長い歴史を持つ。更に付け加えると、現在も調査は継続中であり、近々のうちに調査が完了する予定はない。そしてこの時間の“長さ”は、色々なことを示唆している。

日本の近代歴史学の歴史は100年以上を数え、例えばその時間帯全てが実証主義的な歴史学の手法であった、という乱暴を言うつもりはまったく無いが^[25]、それでもその時間は研究の現場で研究者が「史料」と向き合ってきた時間でもあった。それゆえ、歴史研究において史料とどう対峙するかという視点と方法の検討、あるいは「史料学」、「古文書学」の歴史もまた同様に100年以上を数えると言える。特に現在から数えて60年あまりは“戦後”であり、そのなかでの歴史研究の動向の一例は先に述べたとおりである。そして星野家文書調査の60年あるいは40年はその流れのなかで歩んできた。その点で、この調査の歴史を振り返ることは、日本の日本史研究の一端を傍証することに繋がるかもしれないし、「史料学史」、「古文書学史」、または「アーカイブズ学史」に一つの型を提供する可能性もあると考える。

しかしながら一方で、調査40年という歳月は、長すぎる感も

強い。星野家文書を利用して書かれた研究は多くなく、それは調査が完了していないことと無関係ではないだろう。研究としては、まず初期に北条浩「幕末期における商品生産の一考察」がある^[26]。山林、入会、温泉の研究で著名な北条氏は1967(昭和42)年に調査をした徳川林政史研究所の主任研究員であった時期もあったが、同論文は同所の調査前である1963(昭和38)年の発表であるので、当該調査をもって研究をしたとは考えられない^[27]。しかしながら当論文では星野家文書を蜂須賀家文書等とともに多く参照して、山梨県南都留郡・北都留郡地方の絹織業の展開と農業と入会利用の結び付きについて論じている。最近の研究では、川越美穂「政治と聖蹟」がある^[28]。川越氏は明治天皇の聖蹟に関する問題を検討するなかで星野家を事例として扱って言及するとともに、星野家文書も引用している。先に挙げた作業記録ノートによれば川越氏は2006(平成18)―2007(平成19)年の調査に参加しているので、あるいはこの折に文書に出会い、確認をされたのかもしれない。なお、もう1つ、星野家文書を引用してはいないが、明治天皇の聖蹟に関連して星野家を紹介し、また星野家文書調査に関するエピソードを紹介しているものに、村尾次郎「明治天皇の巡幸」がある^[29]。村尾次郎の研究の位置付けや評価に関係なく、ただ星野家文書を追っていて村尾次郎にたどり着くところにこの星野家文書の面白さがあると思うのだが、それでも、筆者が現在確認できたのは以上の3件である。多用されればよい、ということではないが、このように文書調査と文書利用の問題は重くまた難しく存在すると言える。

調査に時間がかかるのは様々な事情がある訳であるからそれを簡単に批判することはできない。しかしそれでも、例えば一個人(民間)で歴史的な文書を保存し調査に対応し続けていくことのご苦労、または文書の置かれる保存環境、文書をどのように研究に提供していくのか、といった実態や問題を考えれば、調査方法の更なる検討、少なくともそういった負担を軽減し問題点を解決する方法の検討もまた必要であると考ええる。そして、それらの検討は、歴史研究やアーカイブズ学研究に少なからずフィードバックするだろう。以上の点を含め、このように今後検討すべき問題は山積している^[30]。

しかし、そうは言いつつ、さはさりながら、やはりこの星野家文書調査は魅力的である。私事で恐縮だが、2009年から調査に参加している筆者としては、調査が40年近く続いていたことは個人的には幸いであった。またくずし字が読めない場違いな筆者は、星野家で、楊守敬や頭山満の書、また地元

出身の東北帝国大学医学部生が同仁会防疫診療班として無錫に行く際に当時のご当主に送った戦時中の挨拶状、北海道帝国大学の“納豆博士”半澤洵にも繋がる「宮城野納豆製造所」[31]とのやりとりを示す葉書(先々代のご当主である奇氏は恵迪寮歌「環珞みがく」の作曲者としても知られている北海道帝国大学出身であるが、この奇氏の代から星野家の家業は納豆製造業である[32])など、自身の興味関心が高い事例にはからずして出会った。このときの驚きや嬉しかったことは今でも思い出す。やはりこういったことは、実際に参加しなければわからない。また、これは個人的経験であるので本来の調査とは直接関係ないが、実はこういったなかに歴史やアーカイブズ学的探求のタネが潜んでいるかもしれないと思う。

1 —— 山梨県大月市星野家と星野家文書全般については、星野喜忠・井上豊編「心に舞う」(4)花咲本陣、日本ステンレス工業株式会社、2007年10月、に詳しい。

2 —— 以上、文化庁「国指定文化財等データベース」(URL : www.bunka.go.jp/bss/ (2012年9月1日確認))、パンフレット「星野家住宅」(大月市教育委員会発行、発行年月不明)を参照。

3 —— 「星野家住宅」<http://www.fujinato.com/index.htm> (2012年10月30日確認)

4 —— このときの明治天皇の巡幸について、宮内庁編「明治天皇紀 第五」、吉川弘文館、1971年3月、では、天皇が花咲まで肩輿にて移動し花咲からは馬車に戻した、との記載はあるが、星野家への言及はない(87頁)。しかし、明治天皇聖蹟保存会編「明治天皇行幸年表」、大行堂、1933年10月、によれば、同年6月18日に星野家で御小休したとの記録がある(147頁)。

5 —— 1919(大正8)年4月10日公布、同年6月1日施行。同法律は当初は内務省所管での文部省に移った。現行の文化財保護法(昭和25年5月30日法律第214号)の成立により廃止される。

6 —— 「文部省告示第400号」、「官報」第2651号(昭和10年11月2日土曜日)、1-2頁

7 —— 西村幸夫「『史蹟』保存の理念的枠組みの成立——『歴史的環境』概念の生成史」、「日本建築学会計画系論文報告集」第452号、1993年10月、177-186頁

8 —— 「文部省告示第64号」、「官報」第6435号(昭和28年6月29日火曜日)、205-207頁

9 —— 「明治天皇聖蹟」を巡る諸問題については、柴崎力策「関東地方における明治天皇親率演習——一八八一年の厚木行幸を中心に」、「年報近代日本研究 12・近代日本と情報」、山川出版社、1990年11月、に「明治天皇聖蹟の史跡指定」についての指摘がある。その他、この問題の主たる研究として北原系子「東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史」、国立歴史民俗博物館編「国立歴史民俗博物館研究報告」第121集、2005年3月、川越美穂「政治と聖蹟」、鈴木淳編「史跡で読む日本の歴史(10)近代の史跡」、吉川弘文館、2010年3月、所収、などがある。

10 —— この項の記述の多くは、安藤正人・青木睦「民間所蔵史料の保存・管理に関する研究——山梨県大月市星野家文書を素材にして」、「史料館研究

紀要」第27号、1996年3月、186-254頁、を参考している。

11 —— 星野喜忠「星野家文書について」、星野喜忠・井上豊編前掲書、71頁

12 —— 大月市役所ホームページ「文化財保護法による指定物件一覧」、URL : <http://www.city.otsuki.yamanashi.jp/17/kyodo/hogo/bunkazaiichiran.html> (2012年9月30日確認)

13 —— 以上、安藤正人・青木睦前掲書、星野喜忠「街道文化の交差点」、星野喜忠・井上豊編前掲書、など

14 —— 安藤正人・青木睦前掲書、249頁

15 —— 星野喜忠「星野家文書について」、星野喜忠・井上豊編前掲書、70頁

16 —— 安藤正人・青木睦前掲書、247頁。同記述内の「所先生」とは徳川林政史研究所の所三男氏のことと考えられる(次章参照)。

17 —— 村尾次郎「明治天皇の巡幸」、「明治聖徳記念学会紀要」復刊第8号、1993年7月、では「中央大学商学部商業史研究グループ」としている(11頁)。

18 —— 安藤正人・青木睦前掲書、248-247頁

19 —— 以下、安藤正人・青木睦前掲書、247頁

20 —— この項については、安藤正人・青木睦前掲書、246-245頁、安藤正人「星野家文書の調査と整理」、星野喜忠・井上豊編前掲書、62-65頁を参考にした。

21 —— 「史料保存」に関する議論は膨大である。例えば同時代的動向を示すものとして、1977年、「地方史研究」27(6)では、150号記念「戦後地方研究運動の総括と展望」として、「地方史研究と史料保存・文化財保護運動の点描」を特集している。なお、これらの歴史学の問題は、「史料保存」、「文書館」といった点でアーカイブズ学の重要な問題でもあるといえる。

22 —— 安藤正人・青木睦前掲書、244頁、安藤正人「星野家文書の調査と整理」、星野喜忠・井上豊編前掲書、65頁。なおこの温湿度計測は、1994(平成6)年4月-1995(平成7)年4月にも実施している。この計測結果を含めた星野家文書の保存環境調査については安藤正人・青木睦前掲書に詳しい。

23 —— 安藤正人「星野家文書の調査と整理」、星野喜忠・井上豊編前掲書、65頁

24 —— 星野喜忠「街道文化の交差点」、星野喜忠・井上豊編前掲書、39-40頁

25 —— 赤坂憲雄・玉野井麻利子・三砂ちづる編「歴史と記憶——場面・身体・時間」、藤原書店、2008年4月、例えば玉野井麻利子「歴史人類学と記憶」、同書、156-177頁、などでは、記憶が歴史学研究の幅を広げることに寄与したことを指摘しているが、その論の中では歴史学での実証主義的な手法(玉野井氏によれば「文書中心主義」)には懐疑的であるようである。

26 —— 「社会経済史学」28(6)、1963年8月、60-78頁

27 —— 村尾次郎前掲書、では北条氏を1950年代に星野家に調査に入った中央大学の関係者としている(11頁)。

28 —— 鈴木淳編「史跡で読む日本の歴史(10)近代の史跡」、吉川弘文館、2010年3月、「近代史跡の課題」、190-210頁、所収(前掲註9参照)

29 —— 同文は1992年10月に行われた講演の記録である(前掲註17参照)。

30 —— 民間所在史料の問題に関する議論も多く存在する。例えば個人所蔵者に関する指摘として寺澤正直「民間所在史料の危機状態に対する個人所蔵者の意識状態と対応能力の関係」、「日本図書館情報学会誌」55(4)、2009年12月、230-244頁、がある。また、「地方史研究」55(2)、2005年4月、では「民間所在史料のゆぐえ」という小特集が組まれており、平井義人「阪神・淡路大震災の教訓は生かされたのか——文化財保護法を柱にした「地域史料」調査の実践——」などが所収されている(26-36頁)。

31 —— 「宮城野納豆製造所」<http://www.miyagino-nattou.com/> (2012年10月30日確認)

32 —— 「富士納豆」<http://www.fujinato.com/natto.htm> (2012年10月30日確認)

星野家文書調査 2013年度春の調査と 40周年記念行事の お知らせ

星野家文書調査会代表 安藤正人

1——星野家文書調査： 2013年度春の調査

- 【日時】** 2013年5月3日[金]午前10時
— 5月4日[土]午後4時頃
- 【場所】** 重要文化財下花咲本陣星野家住宅
- 【作業】** 1973年の調査開始から80年代頃までに作成された星野家文書仮目録の補充記述とデータ入力と装備作業を数年続けてきましたが、現在は2004年以降に新たに発見された史料の概要調査、内容目録作成、保存手当などの作業を順次行っています。
- 【宿泊】** (両日参加の場合) 大月市賑岡
金山鉱泉山口館(予定)
(1泊2食付7,000円程度)
- 【費用】** 交通費・宿泊費とも自己負担
- 【参加資格】** 1: 地域史料の保存活用のために地道な努力を惜しまない気持ちがあること
2: 近世・近現代文書のくずし字がある程度読めることが望ましいですが、必須ではありません。

2——星野家文書調査 40周年記念行事

- 【日時】** 2013年11月10日[日]
- 【場所】** 重要文化財下花咲本陣
星野家住宅など
- 【内容】** 詳細未定
(星野家文書の展示や講演を予定しています。)

参加希望の方は、事務局久保田宛に
メール(mingbaideming0721@gmail.com)でご連絡下さい。